

日本体育学会
体育哲学専門領域

会報

Vol.18(2), August, 2014

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 2014 箱根合宿研究会参加報告
- ♪ 運営委員会からのお知らせ
- ♪ 次号予告

巻頭言

杉山 進（お茶の水女子大学）

加齢とともに腰や膝などに障害を抱える人は数多い。ご多分に漏れず私も、整形外科通いは長い。若い頃には激しい運動からくる怪我で、また中高年期には無理な運動による肉離れに悩まされて来た。丁度その頃、忙しさにかまけてある時期は全く運動しなかったり、ある期間は好きな運動ばかりして、心身だけでなくからだ全体のバランスを欠いていたらしい。定年に近づいた昨年膝が痛くて、また頻繁に通い出した。

そこでの医者の見立ては筋力不足だった。膝を支える太ももの前後の筋のバランスが悪く、前面の大腿直筋と大腿四頭筋に比較してハムストリングの筋力が不足しているとのことだった。理学療法とそして痛みがなくなってからは運動療法としてストレッチや筋力トレーニングを指導された。変なプライドからか、どこか恥ずかしくもあり、少し意地悪な質問や意見などしてきたが、5ヶ月経った今、すっかり良くなった。

体育の教員にとって医者の診断はまさに身を切るほどに恥ずかしかったが、今になって自分のその頃の生活を振り返って見れば充分領ける。素人療法で、膝関節が悪ければ周辺部位の筋力を高めればよいなどと、特定箇所の筋力トレーニングばかりしていて、全身に渡ってのそれが不足していたのだろう。

ある時、リハビリ中の理学療法士が左膝周辺のマッサージと同時に右腰周辺のマッサージも行った。右膝を庇うばかりに反対側の右腰に負担がかかるという。膝周りの筋トレでなく、大臀筋やハムストリングなどの筋力トレーニングを指導し、主働筋ばかりでなくその運動を支えるインナーマッスルをも鍛えなくてはいけないという。損傷部位とは一見関係ないような箇所をも考慮するこうした全体的考え方を整形外科通いで始めて聞いた。

最近の整形外科はスポーツ整形と銘うって、MRI による詳細な画像によって可能になった内視鏡手術などで、出来るだけメスを入れる箇所を少なくして素早い現場復帰をはかるなど格段と進歩したと言われる。どうも運動療法も含めてリハビリテーションもそのようだ。そんなことから以前から本棚に積んでおいた『動作の意味論』を読んでみた。著者の長崎浩はリハビリテーション専門医だ。この本によれば、ある動作はさまざまな身体運動から構成されており、そのうちの一つの身体運動には多くのさまざまな筋が関わっている。最も基本的な座る・立つ・掴むなどの基本動作はそれぞれの身体運動には還元されないという。今日迄の個性的な動作歴があり、よくもわるくも動作の癖や運動の癖があり、基本動作とはそうしたもののなのだという。こうした運動習慣をそのまま受け入れるリハビリ医

学での考え方に大変驚いた。

大学で専門且つ教職科目としての体育原理を担当して20年、学生の無関心を口実に授業内容は10年前と変わらず大してバージョンアップもしてこなかったが、一番強調してきたことは体育には無限の可能性があるということだ。その根拠として人間の身体についての論考を丁寧に解説してきたつもりだ。身体の知いわゆる身体知に体育の教育的基礎をおくこと、これを今も変わらず授業の核としてきたつもりだ。抽象的な物言いでもれほど伝えられたか心もとないが、来学期も相も変わらず同じ調子でやろうと考えている。

悩まされた膝の痛みという身近な出来事に、身体知同様の事態があることに改めて気づかされた。違いは一方が人格の一部、個性の一つとみるのに対してもう一方では治療のための情報として扱うという違いだろうか。興味は尽きないがひとまずここまでである。

杉山 進 (sugiyama.susumu@ocha.ac.jp)

体育哲学考

内山 治樹 (筑波大学)

昨年、「コーチの本質」と題する論文を公表した。なぜ、それを書いた、否、書かねばならなかったか、その回答も含め、私なりの「体育哲学」について概述したい。

現在の私の専門領域は、「バスケットボールコーチング論」である。学群から大学院にかけて取り組んでいたのは「体育教授学」で、それもドイツ語圏、特にオーストリアのそれであったから、自分でもこの「転回」に驚いている。当時、在籍した研究室は現在の「体育哲学」ではなく「体育原理・方法」だったこともあり、体育という教科における「陶冶内容の構造と選択の理論」(ヴェーニガー)の探究は初学者にとって非常に魅力的であった。が、公募の第一要件が「体育実技(バスケットボール)」で、採用後、「バスケットボールの論文がないので、それを書くように」とか「勝利」を希求する運動部を指導せよとの下知もあって、爾来、「バスケットボール」が主たる研究対象になった。加えて、「体育教授学」が人間の身体面からの形成または陶冶の現実をその認識根源とし、陶冶事象のもつ「何のために」「何を」という課題性の側面を問題にするなら、それは「コーチング論」と同質性がある、と得心しもしたのである。

しかし、当初は「勝利」にかかわる知識が全くもって不足していた。現役時代の「体験知」のみが頼りであった。また、所謂「ハウツウもの」も含め、従前の言説はまさに「そのつど」であり、練習環境の劣悪さに加え身体能力も低く経験もないチームには何の役にも立たなかった。かといって、ラグビーのモールは「オートポイエーシス」の成せる業であると見做すポスト・システム論や実践知や暗黙知などの「センスデータ」を金科玉条とすることにも同調できなかった。そこで、まず目指したのが、勝利を実現するための最も根源的な存在解釈のための地平の開拓であった。つまり、「そのつど性」に即して、あれこれの現象の任意の偶然性からもっともらしい言説を取り出すのではなく、様々に異なった在り方において実存している固有の身体技法の存在様式の中に、現象の陰に隠れてその実その意味と根拠を成すその存在を規定するものとして貫通している「いつでも性」を覚知しなければならない、としたのである。だが、アプリアリなそれ、別言すると「解釈を拒絶して動じないもの」(小林秀雄)だけで、「競技者をコーチが勝利の実現に向けて先導すること」(p.683)と規定される「コーチング」は充足できなかった。そこで、次のような仕組みからアプローチすることにしたのである。

すなわち、グローバル化した現代において飛び交う知識や情報は決してコーチの行動選択に確定的に回答を保証するものではない。それどころか迷いの源泉でもある。だからこそ、「独断的・恣意的」なものを当てはめ押し付けてはならないのであって、そうではなくて、表層に映ずる現象を実際に深層で動かしている内在論理に通暁する必要がある。而して、その論理は、一回きりの体験を省察し、その積み重ねによる「経験知」と一般性・必然性を特徴とする「概念的知・学的知」とを融合させ、それを critical evidence たる「理論知」として昇華せしめて、再び実践で検証していく、という往還サイクルから成る、というものである（理論知の役割は、一見無関係に見える事象の間に隠れた結びつきを予言し、その予言が実証されることにある。この意味で、そのサイクルの実効性は、異動後の日本一という結果から諾われるであろう）。

一方で、この作業は、「解釈学から出発する普遍的な現象学的存在論」（ハイデガー）と知識の淵源としての認識論の双方を射程に置いた、佐藤先生の言葉をお借りするなら、「バスケットボールを哲学する」ことだったのである。管見によれば、「哲学する」とは、論理を意味する「ロゴス」に象徴されるように、基本的には論理的思考のことであり、論理的に問題を解決していくツールとして使うことが可能である。とすれば、「哲学者に類比する」（p. 687）と見做されるコーチにおいても、「無知なる競技者」を「先導」する際、運動文化と身体能力を生成するプロセスの「二重作動」（p. 687）から成るコーチングを「哲学する」ことは、身体能力を介した運動文化の「現状への馴致」と「現状からの超脱」の「縮約」（ベルクソン）を促して、勝利を実現する原動力と成り得るのである。

このように、「体育哲学」は、私にとって、勝利の実現に向けた論理的思考が種々求められる中で、継起する現象の複雑多様性を深層で支えて秩序づけている内在論理と実践とを架橋するに不可欠な土台となっている。勝利へと導く「アリアドネの糸」のようなものは簡単には見つからないかもしれない。しかし、「哲学する」というその初発の方向性は、競技の世界に限らず、「不断の自己研鑽」を通して今後も「上向への旅」（プラトン）を続ける上で不変に保持されていくであろう。

内山 治樹 (uchiyama@taiiku.tsukuba.ac.jp)

書籍紹介

大田堯 (2013) 『大田堯 自撰集成 1 生きることは学ぶこと

—教育はアート』。藤原書店。

中澤 雄飛 (国士舘大学大学院)

本書は元日本教育学会会長でもある著者が、これまでの講演・論文を集成した第1巻(全4巻)であり、学習者の学びに着目し、それを支える教育を「アート」と表現する点で興味深い一冊です。本書におけるアートとは、いわゆる「芸術」という意味に限定されるものではなく、「わざ、創造的な仕事を含むもの」(p. 11)とされ、それ故にあえて教育的営みを示す言葉として使用されています。よって本書においては、子どもたち一人ひとりの感性が、他者や事物との出会いを通じてひびき合うことが教育的営みとして重視されています。それを端的に示す例として、本書では「啐啄同時(そったくどうじ)」という言葉が紹介されています(p. 7)。「啐」とはヒナが卵の内側からコツコツとサインをおくること、「啄」は外から親鳥が殻をつつついて、間髪を入れずに「同時」に卵を割ることを意味しており、こうした内外のひびき合いによって両者は新たな世界に導かれるというものです。

親鳥が一方的に殻をつつくのではなく、ヒナの出すサインを見極めて応じることが肝要とされ、そこからは教えることに先立って学習者の学びを重視するという著者の教育観を窺うことができます。

著者によれば、人間は社会や文化への適応が求められることから、「人間は生まれたときからすでに学習を始め、息をひきとるまで学習をしている」(p.92)とされます。従って、学習とは人間が生きることと不可分の関係にあり、教育とはその学習を支援することであるという主張です。それは、教育を考察する上で学習者の視点に着目することの重要性を示唆するものです。著者は、上からの人づくりを目指す教育を批判し、自己変容の可能性はあくまで学習者自身に備わっているとし、「教育は、その子その人のために演出するアート」(p.94)と指摘します。それは、教育的営みにおいて学習者を全面的に信頼するプロデューサーとしての教師の存在という新たな視点を提示するものです。

本書の構成は、人間の生の視点から教育を論じる「Ⅰ子育て・教育はアート」、社会や文化における子育てに着目した「Ⅱひとなること／ひとねること」、子どもの権利という視点から社会や教育の在り方を検討する「Ⅲ子どもの身になって—社会的文化的胎盤を生きる」の3部からなっています。私にとって、「Ⅱひとなること／ひとねること」における習俗社会の子育てについての洞察は、特に興味深いものです。例えばそこでは、文化伝達のかなめとして「こつ」や「かん」が取り上げられており、『おぼえる』『体得』とでもいうほかない文化の創造的な伝わり方、伝え方は、文化の核心にある部分の伝達ほどこれに頼らざるをえない」(p.190)とその重要性が指摘されています。こつやかんの伝達は、事物についての情報を知るだけでなく、伝える側と学ぶ側が共に事物に直接ふれながら探求する中で、両者のひびき合いによってなされるものであり、それはまさにアートとしての教育の営みと言えるのです。またそれは、習俗社会に限られたものではなく、『学問することの実感』『手ごころ』をおぼえることこそ、学問の要諦」(p.190)とされるように、今日の教育問題の一端を見事に映し出しています。本書に顕れる教育者としての著者の温かいまなざしは、教師と生徒の関係論といった問題を改めて考える重要なシグナルを投げかけてくれるのです。

中澤 雄飛 (yuhinakazawa@hotmail.co.jp)

私の研究

「新体操と芸術の関係における一考察」

浦谷 郁子（日本体育大学大学院）

私は、16年間の選手生活の中でルール的重要性に気づかされました。特に2000年シドニーオリンピック大会後のルール改正は、大きな衝撃とともに今の私の研究の原点ともいえる新体操のルールに疑問を持つきっかけとなりました。そこで、私は大学院に進学し、新体操における美の理論に関する考察を深めました。

修士論文では、上記に示したシドニーオリンピック大会後のルール改正でもっとも変化した難度要素に注目し、研究を進めました。新体操の難度要素は、Y字バランスや片足を軸に回転するピボット、足を左右前後に開きジャンプすることです。その難度要素の開脚度はこのルール改正を皮切りに過度になりはじめ、今では180°以上開かなければジャンプとして成立しないまでになりました。こうした過剰なまでの柔軟性が受け入れられたことにより新体操は、これまでの難度要素の範囲を越え、柔軟性がなければ美しくないとい

う芸術的側面に対して偏った考えをもつようになりました。つまり、新体操の芸術的評価の混乱は、難度要素によって引き起こっていることを明らかにしました。

以上のように新体操を哲学的視点で考察することは、これまであまりされていませんでした。いわば、新体操はスポーツや芸術的側面の指針が明確ではなかったのです。そうしたことが、新体操の芸術的評価に混乱を引き起こしているのでしょう。そこで、現在はスポーツと芸術の関係性について新体操を中心に考察を深めています。

新体操は、美しく優雅なイメージを持つことが多いかと思います。それは、身体に一本の筋が通ったシャンとした感じや巧みな手具操作で翻弄する様のように何かを表現しようとする芸術的側面を用いたスポーツだからでしょう。しかし、新体操に限らず、芸術的側面を加味したスポーツはスポーツと芸術の狭間で揺れ動くことがしばしば見受けられます。たとえばシンクロナイズドスイミングは、今年から主観が入り得る採点種目で客観性を高める狙いを求めて厳密なルール改正がなされたと報じられました。この客観と主観こそがスポーツと芸術をあらわしています。こうした問題は芸術的側面を加味したスポーツには欠かせない議題でありながら、言及なされていないのが現状であります。

スポーツと美学についての研究は、1970年代になってからはじまり「スポーツは芸術か」といった論争が繰り返されてきました。私はその象徴としてワーツとベストの2人に注目して研究を進めています。ワーツはスポーツとしての芸術といった考えのもと、スポーツと芸術には何らかの関係があるとしています。[Wertz, S. K. (1984) (Spring) Context and Intention in Sport and Art, Southwest Philosophical Studies, 8, pp. 144-147. Wertz, S. K. (1987) Aesthetic Creativity in Sport, Sport Inside Out, David, L. Vanderwerken, K. Wertz, S. K. Journal of the philosophy of sport, pp. 510-519.] 一方ベストは、スポーツは芸術でないと切り切っています。[Best, D. (1974) The Aesthetic in Sport, British Journal of Aesthetics, pp. 197-221. Best, D. (1985) Sport Is Not Art, Journal of the Philosophy of Sport, 12, pp. 25-4] この対局する論争は、まさに客観と主観、スポーツと芸術の狭間に揺れ動く芸術的側面を加味したスポーツにとって重要な論争であります。しかし私は、ワーツとベストが、サッカーや陸上のようにゴールや記録を重んじるスポーツに特化して論を展開していることに疑問を抱いています。なぜなら、サッカーや陸上は、芸術的側面を加味したスポーツのように芸術的評価を重んじるといった点で結びつきにくいものがあるからです。このようにワーツとベストの論争に欠けているものを探り、よりスポーツと芸術の関係を明確にすることを目指しています。

これまで私は一貫して新体操における採点規則の中でも芸術的評価について研究を進めてきました。芸術は主観であることから、答えが1つに絞られることはありません。しかし、その芸術的側面を評価の対象とするスポーツは、客観的判断によって評価されなければスポーツとしての資質が問われることとなります。その資質がなんであるのか問いつづけることが芸術的側面を加味したスポーツ、すなわち新体操の揺らがぬ評価をつくりだすことに繋がることを期待して研究を進めていきたいと考えています。

浦谷 郁子 (ikuko_u5ikuko_u5@yahoo. co. jp)

箱根合宿研究会
に参加して

箱根と私

佐藤 徳仁（筑波大学体育専門学群）

箱根で行われた合宿研究会に参加して、哲学の幅広さを知りました。哲学の言葉ではどうしても過去の哲学者を連想して、とても難解なことばかり行っているかと思ってしまいますが、体罰問題やボランティアの話など、話題の幅広さにはいつも驚かされます。私自身も、体罰問題について卒業論文を進めていく予定ですが、今回はいくつか体罰問題の話もあり、とても参考になりました。

さて、今回の箱根合宿研究会ですが、何より驚いたことはアットホームと言うか合宿の雰囲気がとても柔らかいということです。幼少から剣道を嗜んでいる私ですが、剣道に多少封鎖的な雰囲気があるせいでしょうか、今回のように初めて参加する合宿で歓迎されてこの合宿の一員として参加できたことは、皆さんの優しさのおかげかと思います。肩ひじを張らずに、楽しく参加できて今回の合宿はとてもいいものだと思います。

余談ではありますがご飯がとてもおいしかったです。宿での食事は毎回食べるのがもったいないくらいでした。温泉もついていて、長旅に疲れていた身体を心地よく癒してくれました。これも含めて、楽しい合宿でした。

さて先にも書きましたが、私は幼い頃から少々剣道をやっております。最近武道必修化などで価値を見直されつつある剣道ですが、教育に期待される効果がどれほどあるのだろうか、と一抹の不安もあります。と言うのも、剣道は少し前時代的と言いますか、お堅い雰囲気を持っています。上下関係の厳しさや礼法の徹底など、素晴らしい文化ではありますが、同時に近寄りがたさを、剣道に詳しくない人たちは感じてしまっているのではないかと思います。野球などほかのスポーツにも厳しい上下関係や礼儀の徹底はあります。しかしその中で武道が選ばれたということは、それ以上に何か得るものを求められて武道が選ばれたということでしょう。けれど学校の教育の場で最初から上下関係や礼法をやらせても、それが子供に受け入れられるのか、不安です。

私は今回の合宿で受け入れられ、それが嬉しくてより哲学への研究をがんばろうという思いが強くなりました。武道も、そうやって生徒を受け入れ、生徒に受け入れられる授業になってくれればいいな、と思います。動きの技術を教えるばかりではなく、武道に求められている心意気や意義を一緒に学んでくれるといいな、と思います。

しかし、武道には問題もあります。教師から生徒への体罰ではなく、上級生から下級生への暴力など、教材として注目されている武道が、本当に適しているのか疑問が残る現状であることも確かです。

私はこの先、大学院に進学して研究を重ねた後、教師になりたいと考えています。卒業論文のテーマである体罰問題などを学びながら、様々なことを学んでいきたいと思っています。

とにもかくにも、まずは大学院に合格して来年もこの箱根合宿研究会に参加したいと思っています。精進していききたいと思っています。

佐藤徳仁(satou.h.1@live.jp)

○今年度の日本体育学会 (於：岩手大学ほか) に関する情報
「体育哲学専門領域企画」と「一般発表プログラム」の日程についてお知らせいたします。

8月26日 (火)

12:00-13:00 運営委員会 (アイーナ 会議室 802)

8月27日 (水)

一般発表 1

09:00~10:00 座長：三原幹生 (愛知教育大学)

跡見順子 (東京農工大学) 身心の一体化と活性化の論理《その一》不安定な身心の二面性と制御可能性

清水美穂 (東京農工大学) 身心の一体化と活性化の論理《その二》震災後の科学と女性科学者の役割・男女共同参画の加速は体育から

シンポジウム

10:00~12:00 シンポジウム A：スポーツ実践の思想 (二年目)：スポーツ実践の思想
—実践思想のパフォーマンス—

司 会：田井健太郎 (長崎国際大学)・佐々木究 (山形大学)

演 者：米村耕平 (香川大学) ゲームの発展過程に対応したゴール型ゲーム教材の開発から

石岡丈昇 (北海道大学) リズムの受肉—ボクシングジムに埋め込まれた思想

木庭康樹 (広島大学) ポルトガルサッカーの実践思想とレンディメント

—戦術的ピリオダイゼーションの視奏力—

12:00-13:00 総会

一般発表 2

13:00~14:30 座長：石垣健二 (新潟大学)

渡邊佳 (東海大学大学院) ボランティア活動における「今」

森田啓 (千葉工業大学) PBLとしての大学体育—教えあい学びあいを中心に—

高橋浩二 (長崎大学) 運動実践に内在する意味内容—技術と実践の関係についての現象学的観点からの考察—

一般発表 3

14:40~16:10 座長：高橋浩二 (長崎大学)

成家篤史 (東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科) 心身一元論的見方に基づく発達観に関する研究

坂本拓弥 (明星大学) 体育教師が発することばの身体的意味—メルロ=ポンティの言語論を手掛かりに—

松田太希 (広島大学大学院) スポーツ集団における体罰温存の構造—S.フロイトの集団心理学への着目から—

16:20~17:30 浅田学術奨励賞・受賞記念講演

司 会：久保正秋 (東海大学)

演 者：岡部祐介 (至誠館大学)

テーマ：<スポーツ根性論>を再考する—1960年代における「根性」の変容と「いま」および「これから」

8月28日(木)

一般発表4

09:00~10:00 座長：高根信吾(常葉大学)

長島和幸(福岡大学) わが国におけるレスリングをめぐる思想史的展開についての基礎的考察—八田一朗の生い立ちに着目して—

別所秀夫(広島大学大学院) 「体力」目標と東京オリンピックの因果性の研究

シンポジウム

10:00~12:00 シンポジウムB：オリンピック・レガシー研究の現状と課題

司会：大津克哉(東海大学)

演者：荒牧亜衣(筑波大学) オリンピック・レガシー研究に対する哲学的アプローチの意義

本間恵子(翻訳家・リサーチャー) 「スポーツレガシー」の重要性と実現に向けた課題

舛本直文(首都大学東京) オリンピック・インパクト研究(OGI)の現状と課題

菅井達哉(日本スポーツ振興センター) オリンピック・レガシーのガバナンス研究の課題について

一般発表5

13:00~14:30 座長：高岡英気(敬愛大学)

根本想(早稲田大学スポーツ科学研究科) 武田千代三郎の「アマチュアリズム」再考—「競技道」との関係に着目して—

高平健司(筑波大学大学院) 嘉納柔道思想の形成と井上哲次郎の現象即実在論

中澤雄飛(国士舘大学大学院) 芸道の学習論—学びとしての身体教育—

一般発表6

14:40~16:10 座長：阿部悟郎(仙台大学)

林洋輔(筑波大学 国士舘大学) <生き方としての体育哲学 Philosophy of PE as a Way of Life>の成立へ向けた序論—体育学における<哲学>の位置—

神野周太郎(仙台大学大学院) 体育学における成長概念の検討—デューイの成長概念を中心として—

嶋崎綾乃(八戸学院大学) ダンサーの魅力と身体表現に関する—考察—コンテンポラリー—ダンサーの「色気」に着目して—

16:00~18:00 専門領域合同企画(体育哲学, 体育社会学, 体育経営管理, 体育科教育学) : 保健体育教師への学際的アプローチ

—保健体育教師の資質・力量とその質保障を考える—

司会・コーディネーター：清水紀宏(筑波大学)

指定討論者：木原成一郎(広島大学)

演者：四方田健二(九州共立大学) 教師教育論の立場から—体育教師の成長はどのように促されるのか—

朝倉雅史(筑波大学大学院) 人的資源マネジメントの立場から—体育教師の質をどうマネジメントするか—

中澤篤史(一橋大学) : 社会学の立場から—体育教師はなぜ運動部活動にのめり込むのか—

坂本拓弥(明星大学) : 身体論の立場から—「身体としての体育教師」とは何か—

○体育哲学専門領域の HP について

HP についてお知らせいたします。現在、下記の URL にて HP を公開しております。これに関するご意見もお寄せ下さい。

<http://163.43.177.95/genri/framepage5.html>

○専門領域メーリングリストへのご登録のお願い

新しいメーリングリスト「Freeml」(<http://www.freeml.com/>)の運用を開始しております。メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、分科会活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げる次第です。グループへ参加するには、事務局：釜崎 (kamasaki@meiji.ac.jp) までご一報ください。事務局にて登録の手続きをさせていただきます。

○体育・スポーツ科学情報コラムの発行について

日本体育学会企画による『体育・スポーツ科学情報コラム』が発行されました。全ての専門領域から情報コラムが寄せられています。下記の URL にてコラムが公開されておりますのでご覧下さい。

<http://taiiku-gakkai.or.jp/column>

(釜崎 太 kamasaki@meiji.ac.jp)

次号予告！

次号は学会報告、研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は高橋浩二 (takahashi@nagasaki-u.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門領域会報第 18 巻第 2 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域
久保正秋 (会長)
編集者 小林日出至郎 (広報委員長)
発行日 平成 26 年 8 月 22 日
連絡先 950-2181 新潟県新潟市五十嵐 2 の町 8050
新潟大学教育学部 025-262-7075 (直通)
アドレス: hinode@ed.niigata-u.ac.jp

【編集後記】

「会報」2号が皆様のご尽力により発刊できました。ご多忙ご多用の中、関係各位のご協力に心から感謝申し上げます。8月25日から28日まで岩手大学を中心に第65回日本体育学会が開催されます。体育哲学専門領域では一般研究発表16演題、浅田学術奨励賞・受賞記念講演、シンポジウムA「スポーツ実践の思想」B「オリンピック・レガシー研究の現状と課題」等が予定されております。情報化・自動化・少子化等の中、健康・体力・コミュニケーション能力等の低下が重要な社会的課題となっております。グローバル化の中、人間力の回復と活性化を可能とし、限りある自然環境と持続可能な社会に貢献できる人間を如何にして育むことができるのか、本領域からの発信が益々期待されております。会員皆様のご健勝を心から祈っております。(K)